

大学における特別活動の学びに関する一考察（小学校編）

A Study on the Learning of Special Activities at University: Series of Elementary School

岡 修一*

Shuiti OKA

抄 録

「特別活動の指導法」という講義は、ともすれば学習指導要領に沿った教育的意義、ねらい、目標、内容等を理解することに重きを置き、学生が受け身になりがちであったと感じている。

そこで、授業の進め方として毎時間必ず、グループワークや話し合いの時間を取り、学生が教師の視点に立つ、ある時は児童になって「特別活動」を本当に身近なものとしてとらえ、自分がその担当者として、今関わっているつもりでグループ間で真剣に話し合い、その結果を必ず次時で全員に紹介し合うことを大事にしようと考えた。特別活動は、全ての教育活動の節目、節目の重要な部分を担い、豊かな人間性や社会性を身に付け、「生きる力」を育む教育活動になくってはならぬ潤滑油の役割を果たしていると信じている。

本稿は、来年教壇に立つであろう学生にすぐ役に立ち、また血となり肉となる学びとは何かを模索した一実践例である。

1 はじめに

4年前、初めて本学で「特別活動の指導法」の講義を担当することになり、15回分のシラバスを作ることになった。小学校の教員を38年間勤め、特別活動の内容についてはある程度理解し実践も積んできたが、4回生という来年教員になる学生に何を教え何を学ばせたらよいのか、一から考えてみたいと思い、学習指導要領——特別活動編——をじっくりと読み、改めて「特別活動」の教育的意義と特質、内容について理解することからスタートした。

そこから、授業の構成の仕方、方向性、計画を立てることにした。勿論、特別活動の目標、基本的な性格と教育的意義、各活動・学校行事の目標及び内容といった、おさえておかねばならないベースになることはきちんと学ばせることが大事である。

しかしながら一年後教壇に立つ学生には、実際特別活動がどう展開されているか現場の実践から学ぶことが何より大事ではないかと考えた。

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

そこで、前年度「近畿特別活動研究協議会」（神戸市大会）を開催し、公開授業、並びに全体会で学校としての三年間の研究の成果を発表した神戸市立甲緑小学校を訪ね、校長先生から直にお話を聞かせていただき、さらに作成された全ての研究冊子、ハンドブック、指導案集一式もいただきシラバス作成の参考とした。

授業を進めていく基本的な方針としては

- (1) 毎時間作業を入れ、個人やグループで考え、話し合うことで特別活動の様々な内容について実践的な素案等を作成することを大事にする。
- (2) 毎回どこかで個人・グループでの発表の場を必ず設定する。

つまり、毎時間に作業、考えること、話し合う場面があれば、学生が主体的に参加する生き生きとした授業が仕組めるのではないかと考えたからである。様々な特別活動のプランを仲間と楽しみながら作成するとともに、小学校時代にタイムスリップし、童心にかえって豊かな感性で身近なものとしてこの授業を感じて欲しいと強く願ったのである。

上記の研究大会の祝辞で、兵庫県教育長の大西孝氏はこうおっしゃっている。

特別活動は、なすことによって学ぶ活動であり、人間的な触れ合いを基盤としながら、自主的、実践的な態度を身に付けるとともに、豊かな人間性や社会性の育成を図る活動です。各学校においては、「目指す児童の姿」を共通理解し、特別活動の教育的意義を踏まえた子どもの自主的、自発的な活動を組織することが大切です。具体的には、人に関わる力を実践を通して高めるための体験活動やよりよい生活を築いていこうとする話し合い活動、さらには、多様な異年齢の子どもたちからなる集団による活動を充実させることが必要です。

資料１・・・・・・第２９回近畿特別活動研究協議会「神戸市大会」研究紀要より

大学の授業の場でも、学生自身が小学校の頃を思い出したり、また子どもの立場で考え、ある時は教師の立場に立って「特別活動そのもの」の実体験に少しでも近づければと願うばかりである。

Ⅱ 授業の実際（展開例）

１ 特別活動の基本事項

１－１ 特別活動の性格と教育的意義（第一回目）

初回は、まず小学校における特別活動とは何か、またその教育的意義について考えることにした。資料として、前述の近畿の研究大会を開催した甲緑小学校の森本校長先生が、平成２４年度神戸市初任者研修会でお話しされた時のものを活用させていただいた。

子どもたちを取り巻く状況、変化をみてみるとこの研究大会の主題設定の中でもふれられているが、今日の社会状況一つとっても、家庭生活の変化が子どもの成長に大きな影響を与えており、親が日々の生活に追われ十分子どもにかまっていられず、物を与えてしまう、それでついゲーム等に集中し外での集団遊びが減ってきた現状がある。そのことが、人間関係の希薄化につながり集団生活への経験不足が、本来集団生活を営むための基になる「社会性」が十分身につかないまま育っている状況があるのではないだろうか。

特別活動が「集団による活動」を基本にする教育活動であり、集団の一員としてよりよい人間関係を築こうとする、自主的・実践的な態度を育てることを第一にしており、このことがまさに「人間関係」を図り、学習指導要領にうたわれている「生きる力」をはぐくむことになるとも重要な活動であることを、この15回の講義でしっかり学んで欲しいと訴えた。

授業で使ったパワーポイント15枚のうち、はじめの4枚を添付、3ページ目・変わりつつある子どもたちの1～7については、学生の実習体験、ボランティア経験の中で感じたことを色々出した。

特別活動の基本事項



平成24年度 初任者研修＜特別活動＞

まず、はじめに



子どもたちを取り巻く社会状況は、
 少子高齢化 地域社会における人間関係の希薄化
 国際化・情報化の進展 価値観の多様化
 社会や家庭生活の変化 集団遊びの減少



- ・家庭や地域社会において社会性を身につける機会が減少
 - ➡ 望ましい人間関係を築く力の未熟
- ・人や物とふれあう直接体験の不足
 - ➡ 感動体験の不足

変わりつつある子どもたち

1. (人間関係) を築く力が弱い。
2. (集団) に適応できない。
3. (規範意識) が弱い。
4. (基本的な生活習慣) が身につけていない。
5. (自己中心的) で協調性に欠ける。
6. (自分) のことに熱心でも、集団には無関心
7. 自分に(自信) がもてない。



本来、培われるべき(社会性)が育っていない。

特別活動で人間形成を！

今後、子どもたちが生きていかなければならない社会

- ・急激な社会の変化
- ・未知の課題に試行錯誤しながらの対応
- ・複雑な人間関係

- ①多様な他者と共に、社会、自然、環境とのかかわりの中で共に生きようとする共生の力
- ②社会生活を営むために必要とされる人間関係形成力、基本的な生活習慣、公共の精神
- ③集団に参画し、自己の能力を生かそうとする自己活用力

学校における望ましい集団活動や体験活動を通して、
 実社会で生きてはたらく社会性を身につけるなど、人間形成を図る。
 まさに、特別活動のねらい！

資料2・・・平成24年度神戸市初任者研修＜特別活動＞資料より

1-2 特別活動の全体計画と各活動・学校行事実施計画の作成（第二回目）

- (1) 小学校学習指導要領解説－特別活動編－P107～P109の指導計画の作成に当たっての配慮事項について学習

(2) 神戸市立甲緑小学校の全体計画一覧表と、個々の四つの各活動・学校行事計画表を見比べ、一覧表にある各活動の ①目標 ②内容 ③組織と運営 ④指導にあたっての4項目が、きっちりと実施計画表に盛り込まれていることを点検・確認するとともに、各学校が年度初めに学校や市域の実態に合わせて独自の計画を作成、職員で共通理解することが大事であることをしっかりと押さえた。



2 グループワークを活用した授業例

2-1 学級活動（第五回目）

（1）計画委員会の役割と係活動・指導案づくり

① 学級生活を豊かにする係活動とは

掲示・図書・音楽・保健の4つの学級の係の「楽しいネーミング」を考える。

係活動

- あるとみんなが楽しくなる活動
- 子どもたちの強い活動意欲に支えられた自主的な活動
- 自分たちで話し合って組織を決め、活動内容を決める活動
- 子どもたちの手で学級生活を楽しく豊かにする活動

資料4・・・神戸市小学校教育研究会特別活動部 学級活動ハンドブックより

② 学級会の話し合いをスムーズに進めるための計画委員会の役割について学習した後、指導案を考える。

ねらい・・・「思い出に残る元気大会」にするために友達と協力して話し合いを進めることができる。（4年生）

- これに沿って本時の展開の
- 話し合いの順序
 - 予想される児童の活動を考えた。（A班の指導案を例示）

8. 活動計画

① 本時のねらい

思い出に残る元気大会にするために、友達と協力して話し合いを進めることができる。

② 本時の展開

第12回 学級会					
議題	寒さに負けない！思い出の元気大会をしよう			提案者	
提案理由	冬の寒さに負けないように体をみんなで動かしたい。みんなの心に残る楽しい大会にしたい。				
役割	司会		黒板記録		ノート記録
話し合いの順序		予想される児童の活動		支援	
1. はじめの言葉 2. 司会グループの紹介 3. 議題の確認 4. 提案理由の発表 5. 話し合い ① 楽しい元気大会にするための工夫を話し合おう。 ② 寒さに負けない種目を考えよう。 6. 決まったことの発表 7. 司会グループからの話 8. 先生からの話 9. おわりの言葉 10. 今日の振り返りをする		・優勝した人への景品を用意する。 ・みんながでる種目にする。 ・応援グッズで盛りあげる。 ・簡単なルールで分かりやすくする。 ・増えおに。 ・フリスビードッジ ・大縄 ・王様ドッジ ・しぼり取り。 ・振り返りをワークシートに書く		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 〈決まっていること〉 日時：12月15日（木） 6時間目 場所：体育館 </div> ・①で考えた内容を元に種目を考えられるように助言する。 ・次回への意欲づけとなるように、話し合いの仕方や司会進行、発言内容のよさを個人名を上げて具体的にほめる。 ・話し合いの内容や決まったことについての意見を書くようにさせる。	

資料5・・・第29回近畿特別活動研究協議会「神戸市大会」学習指導案

神戸市甲緑小学校

2-2 児童会活動（第六回目）

- (1) 代表委員会からの提案・呼びかけで、校舎に掲げる「運動会のスローガン」の垂れ幕を考える。次回全20グループのスローガンを紹介して良いなと思ったスローガンを三点選んで投票。次々回にみんなが選んだ結果を発表する。この方法を毎回定着させた。ちな

みに今年度みんなが選んだベスト3は

1位・・・・・・・・・・“がんばれ”は力が生まれる合言葉

～みなぎる〇〇一等賞～

2位・・・・・・・・・・つながろう みんながヒーロー 笑顔の輪

3位・・・・・・・・・・あつくなれ かがやく笑顔〇〇っ子

がんばる気持ちが金メダル であった。

選ぶ基準として ・1～6年生まで全校生にわかりやすい

・全校生が一つになって盛り上がる

・自然と力がみなぎってくる この3点とした。

(2) 「六年生を送る会のプログラムを考えよう」

・各学年からの出し物が多種多様で、一つに片やらないようにする

・場所、隊形等並び方、入退場の工夫、垂れ幕、飾り物も考え、演技のあとのプレゼントも工夫

(3) 個人の作業としては「あいさつ運動」の標語づくり、校内パトロール運動の一環としてのポスターづくりに精を出した。

2-3 児童会活動 その2 (第七回目)

(1) 神戸市甲緑小における委員会活動の11委員会のうち6つをピックアップし、そのネーミングを考えた。

・委員会は学校生活を向上発展させ、より豊かにしていくために児童の発意を生かし、創意工夫して実際の活動を分担して行う、あくまで奉仕活動ではあるが誇りと意欲を持ち、だれもがよくわかる楽しい名前を話し合って考えた。

例えば ・保健委員会・・・・・・・・レスQ委員会

・美化委員会・・・・・・・・ピカピカ委員会

・給食委員会・・・・・・・・まんぷく委員会 などである

あわせて主な活動内容をどんなものにするか、常時活動やイベント等、広報活動を中心に考えてみた。

(2) 集会委員会による全校生で行う、楽しくて時期的にもふさわしい二学期の活動内容を考える。(毎週木曜日、朝の15分を設定)

(例) 9月9日・・・・・・・・小石拾い集会(運動会前を考えて)など

2-4 クラブ活動 (第九回目)

(1) 活動目標に4年生以上の同好の異年齢集団による活動を通して、興味・関心を追求する楽しさや喜びを実感するとともに、目的達成のためにだれとでも仲良く協力しようと

する実践的態度を育てるとある。児童は次の活動日が来るのをとても楽しみにしており、思いやりや上級生に対する尊敬の気持ちも育ち、望ましい人間関係を築くにはなくてはならない活動である。

私の最終勤務校、神戸市立御影北小で平成5年、第十一回近畿特別活動研究協議会「神戸大会」が開催された時、当時の教職員がつけた楽しくてユニークなクラブ名が現在も受け継がれている。

- (例)
- ・マウスでGOGO! クラブ (インターネット使用)
 - ・めざせ! オリンピックの星 クラブ (リレー、水泳、障害走など)
 - ・日本再発見! クラブ (習字、墨絵、折り紙、ちぎり絵など)

そこで、甲緑小学校の卓球、家庭科、工作クラブ等、11の既存のクラブに上記のような、楽しくワクワクして入りたくなるようなクラブ名を付けてみてはと提案した。

- (2) 次に上記2校の共通のクラブ、独自のクラブを取り上げ、学校や自然環境なども考慮した地域の実態などによって違いがあることを話し合った。

最後に、自分の出身校でのユニークで忘れられないクラブ活動の思い出を発表し合い交流を深めた。

Ⅲ 子どもがかわる学校行事の授業例

3-1 学校行事のもつ意味とは (第十回目)

- (1) 学校行事については、第29回「近畿特別活動研究大会」主題設定の理由の中でこう述べられている。

子どもたちは、豊かな体験の場である集団活動を通して、いろいろな問題に対峙し失敗や成功の体験を積み重ねる。そんな中で、我慢することや努力すること、規律を守り正しいことを実行しようとする気持ち、協力や思いやりの気持ち、役割を得て責任を果たそうとする心など、多くのことを学んでいく。望ましい集団活動による感動体験が子どもたちの心を強く揺り動かし、豊かな人間関係をはぐくんでいる。

資料6・・・第29回近畿特別活動研究協議会「神戸市大会」研究紀要より

(2) 学校行事には様々なものがあり、感動体験を数多く経験することで人間関係やコミュニケーション能力の基になるものが学べる、小学校の教育活動に絶対欠かせないもので計五回分の時間をことにした。

行事のもつ意味について、以前「学校だより」でふれたので紹介しておく。

－ 行事のもつ意味とは －

校長 岡 修 一

運動会へ向けてどの学年も練習に一段と熱を帯びてきた。特に、六年生にとっては最後の運動会。「学校の顔」、リーダーとしての意気込みを示そうと真剣だ。この原稿を書いている時(27日午後4時)にも運動場で組体操の練習に励んでいる声が聞こえている。あれ、今日は4校時にも組体操やってたはずだが……。

五年生も自然学校を終えてきりっとしまり、一回り大きく成長し、たくましくなった気がする。特に鉢伏山登山に全員が挑戦し、励まし合い支え合い、自分の足で登り切った体験は、何ものにもかえられない大きな自信、喜びとなって自らの生活を高めていくために役立つにちがいないと信じている。

行事のねらい、その意味をいくつか挙げると、

1. 学級や学年が一つにまとまり、一つの目標に向かって苦しみ乗り越えてやり遂げた充実感、成就感を与えたい。しんどいこと(練習)を続け、苦しみが大きい程、充実感・成就感も大きい。勿論、限度はあるが、ギリギリのところへ追い込む。それをクリアした喜びを味わわせてやりたい。
2. どの児童も苦しいが、必死で取り組む姿ほど美しく感動するものはない。一人ではなくみんなで作るからなし得るものなのだろう。ひたむきに逃げることなく意欲的に取り組める。いろんな面(体力面とか)で、弱い児童も自分のペースでがんばらせる。多くの力で引っ張ってもらおうと、力以上のものが出せる。
3. 特に高学年の児童は、ぐいぐい引っ張ればがむしゃらについてくる。教師が思っている以上に高いものを求め、素晴らしい力を発揮する。「これは無理だ」と少し躊躇するようなことでも、実は思った以上の力を秘めているものである。その力を、可能性を最大限に引き出す事ができるのが行事である。
4. 自分の心と闘うことを数多く体験させたい。しんどさから逃げたい、逃げ出したい、やめたいと思う心と闘うことを経験させる。「一人だけでないから」苦しみ乗り越えることもできる。ギリギリのところで葛藤し、自問自答し、友だちとの支え合いの中から友だちの大切さ、協力することの大切さ、何より自分を見つめ人間について学んでいくのである。

二学期は、様々な行事が組まれている。一つ一つの行事は数々のドラマを生み、一人ひとりの子どもと集団を高めていく。

行事に取り組む我々の役割は大きい。

資料7・・・神戸市立御影北小学校 学校だより

- (3) 次に、①儀式的行事～⑤勤労生産・奉仕的行事の中から、小学校時代強く思い出に残っている行事の内容を、それぞれ一つずつ計5つ書き出し、その中でも一番の感動体験をグループ全員が出し合い代表者を選び、次回の「感動体験を語る会」を計画した。選ぶにあたっては

- ・とてもユニークで珍しいもの
- ・とても楽しくておもしろいもの
- ・ぜひみんなに紹介したい、知ってほしいもの
- ・ローカル色豊かで、その学校ならではの伝統的なものを基準とした

動画、写真、パンフレット等 資料を用意するグループもあり大いに盛り上がった。

3-2 自然学校プログラムづくり（第十一回目）

（１）「生きる力」育むには、自然体験の積み重ねこそ大事にしなければならない。まず、以前出した「学校だより～子どもがかわる～」から、自然学校の体験や泊を伴う集団での体験活動重要性、素晴らしさを学習した後、活動の中身に特徴のある三つの小学校を紹介、それを参考にしながら４泊５日、４日目までの１１活動プログラムをグループで考えた。その時の留意点は次の５点とした。

- *自然とふれあい、満喫できるもの
- *ここでなければ体験できないもの
- *人間的なふれあいを深め、力を合わせ集団のすばらしさを感じれるもの
- *無理なくゆとりをもって、みんなが楽しめるもの
- *新プログラムを３点以上考える

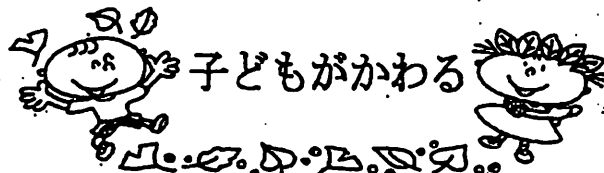
（２）次に、夜のリーダー会議で話し合うべき議題について、活動面・生活面それぞれ４つずつ考えた。

※ 授業で使った「学校だより」を次頁に掲載する。

※ 各班が考えたプログラムは一覧表にして、次回班ごと発表の機会を設けた。

御影北だより 10月

神戸市立御影北小学校



校長 岡 修一

9月12日から17日まで、今年も鉢高原で自然学校を実施しました。天候も全日快晴とはいきませんでしたが、一番力を入れてきた鉢伏山登山をはじめ、キャンプファイヤー、ナイトハイキング（肝だめし）、飯食炊さん、アスレチック、魚つかみ、テント泊など、自然のまっただ中で5泊6日の長丁場、全てのスケジュールが実施でき全員無事に帰ってくる事ができました。しっかり自分を見つめる、自分の力を知る、友だちを知ることができ、随分と自信が付き成長した子どもたちも多かったようです。しかしながら、途中で「帰りたい」と私に直接訴えてきた子もいたように、全く違った環境での暮らしになかなか適応できずストレスや不安を感じ、体調をくずす子も少なくありませんでした。保健の先生への相談・訴えが一日目にはのべ7件でしたが、四日目には91件もありました。5年生にとっていきなり5泊6日は、少しきついかゆなとも思いましたが、殆どの子が日に日にしっかりしてきて、乗り越えられたようでした。自然体験は「体と心を鍛える」ことが実証された6日間でした。

ところで、以前、文部科学省が全国の児童生徒を対象に「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」を実施し、その結果を発表したことがありました。そのアンケートでは、「自然体験」や「生活体験」などのほかに「普段している手伝い」などについても調査しています。

自然体験に関する設問は「海や川で泳いだこと」など9項目あります。その中で、そうした体験が「ほとんどない」とした数字の高い項目をあげてみると、「キャンプをしたこと」（男子40%、女子45%）、「大きな木に登ったこと」（男子37%、女子54%）、「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」（男子34%、女子36%）、「野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと」（男子26%、女子23%）、「ロープウエーやリフトを使わず高い山に登ったこと」（男子55%、女子60%）という結果でした。

生活体験では、「タオルやぞうきんを絞ったこと」など6項目で、「ほとんどない」という回答の高いものは、「弱いものいじめやけんかをやめさせたり注意したりしたこと」（男子37%、女子36%）、「道路や公園に捨てられているゴミを拾ったりしたこと」（男子41%、女子36%）、「赤ちゃんのおむつを替えたりミルクをあげたりしたこと」（男子84%、女子71%）でした。

この調査ではさらに、自然体験や生活体験と、「近所の人や知り合いにあいさつをする」、「友だちが悪いことをしていたらやめさせる」、「バスや電車で席を譲る」などの道徳観・正義感との相関についても明らかにしています。それによると、自然体験が5段階評価でAランクの子どもは、道徳観・正義感で33%がAランク、これに対し、Eランクの子どもは、道徳観・正義感でAランクは8%にとどまり、また、生活体験においても、生活体験Aランクの子どもは道徳観・正義感で49%がAランク、これに対し、Eランクの子どもは、道徳観・正義感のAランクはわずか3%にすぎなかったということで、自然体験や生活体験が多くあればあるほど、道徳観・正義感を多く身に付けているということが明らかになりました。

出発前、色々心配されていたあるお母さんとお会いした時、「帰ってきた時の顔が、随分たくましく見えてうれしかった。でも、一週間たつて元にもどってしまいました。」と笑って話しておられました。でも、きっとがんばった体験は、これから生きてくると信じています。「生きる力」を育むには、自然体験の積み重ねこそ、大事にしなければとつくづく感じる今日この頃です。

3-3 運動会プログラムづくり (第十二回目)

- (1) 運動会・音楽会で、子どもが担う係り・役割にはどんなものがあるだろうか、必要だろうかグループで考える。
- (2) 以前、全校生28名の小学校の運動会を観覧したことがある。まさしく保護者はもちろん地域ぐるみでの参加者、参加プログラムで地域が一体となって大いに盛り上がっていた。そこで、極めて小規模な小学校の運動会のプログラムづくりに挑戦した。作成上、考慮すべき点を次の6点とした。

全校で盛り上げる運動会のプログラムを考えよう
～地域のお祭りだ～ 小規模校で各学年 1 クラスだよ

- ※ 各学年3種目+α・・・・・・・・走、団体競技、体育発表（メイン）
 - ※ 2学年合同もありだよ
 - ※ 地域の方々・保護者の種目も入れよう
 - ※ 地域の方々・保護者と子どもたち合同の種目も楽しいね
 - ※ お昼のお弁当の時間も入れてね
 - ※ 近くの幼稚園・保育所との交流もできるよ
- （
班1 清啓

() 小学校大運動会プログラム

午前

午後

順番

種目

出場者

順番

種目

出場者

3-4 卒業式のビデオ視聴から（第十三回目）

- (1) 卒業式は、小学校における1年間の全教育活動の中で、しめくくりの最も重要な行事である。また、儀式としての位置づけと同時に六年生にとっては“最後の授業”としてとらえられるのではないか。

それは、六年間の「個と集団」の成長の全てがこの二時間余りに凝縮され表現されているからであり、卒業式委員会の担当教師、児童が手作りの呼びかけ、歌いたい歌を選ぶのである。演出・隊形・入退場すべてを、六年生の児童と教師で考え、毎年、ちがった“授業”が展開されるのである。

- (2) 授業では、児童が壇上に上がってからの「門出の言葉」“最後の授業”のビデオを約50分視聴し、教師の人を育てる喜び、誇り、充実感、さびしさを感じると同時に呼びかけの中に、これまでに学習した「特別活動」の内容の何と何が語られているか、しっかり目と耳を働かせながら確かめようと呼びかけた。……{11行事が語られた}

- (3) その後、卒業式が“最後の授業”といわれるのはなぜだろうかと問い、一人一人自分の考えをまとめた。

なぜ卒業式が「最後の授業」なのかあなたの考えを述べよ。

卒業式では、小学校1年からの6年までの思い出や学習内容を振り返り、子どもたちが自らの言葉で発表する場面がある。大きな声で、教職員、保護者、小学5年生そして6年生の前で発表する機会はない経験があると思う。本書、自分たちの成長を示せるよう何回もくり返し練習したろう。どうしたら自分の気持ちを表現できるのか、言葉の練習することは子どもたちの学びになっていると考える。

また、小学5年生とのかけ合いでは、学校の最高学年として学校のリーダーとしての伝達を受け継ぎ、継承する意味合いもあると思う。異学年との交流が上学年の意識が育ち成長につながる。その成長を大勢の前で示し、中学校へのステップとなるのではないだろうか。

授業は教師と子どもが共に創るものだと考える。卒業式は小学6年生と担任が(R)を共に創り上げる授業の最終形態だと思う。

3-5 地域との交流（第十四回目）

学習指導要領では、学校行事の内容の取扱いに関する留意事項の中で次のように示されている。

(4) 「学校行事」については、学校や地域及び児童の実態に応じて、各種類ごとに、行事及びその内容を重点化するとともに、行事間の関連や統合を図るなど精選して実施すること。また、実施に当たっては、異年齢集団による交流、幼児、高齢者、障害のある人々さどとの触れ合い、自然体験や社会体験などの体験活動を充実するとともに、体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実するよう工夫すること。

そこで、いろんな対象パターンを想定してプログラムを考えた。

(1) 六年生と高齢者の方との交流行事を考えよう（老人ホームを訪問する）

- ・活動計画、事前の準備
- ・活動内容 をどうするか

(2) 地域の高齢者の方をお招きして

(各教室で、運動場を使って、色々なことを教えていただく、人生の先輩から学ぶ)

- ・活動計画、事前の準備
- ・活動内容 をどうするか

(3) 異学年交流は

- ・二年生と五年生との交流 (行事名・活動内容を考える)
- ・一年生と六年生との交流 (行事名・活動内容を考える)

(4) 全校生が楽しく過ごす、毎学期一回の縦割り活動(校外へ出かけることも可とする)

おわりに

15回の講義を振り返ってみて、いくつかの反省点、課題等がみえてきた。それは

(1) グループワークの手法が、なかなか目指すアクティブラーニングの要素を満たせず、不十分であったことである。あくまで教師側からの働きかけに対して、学生が色々アイデアを考えるが、言わせっぱなしであったり、個々のグループ内での議論は深まっても、

全20グループ全体が、議論し一定の結論を出す場が持てなかった。学生がもっと自主的・能動的に進められる授業の構成や、自分自身の関わりの在り方を今後は考えたい。

(2) 特別活動での各活動においても、評価基準を設けているにも関わらず、この授業での形成的評価や、多様なルーブリックを活用するなどの評価方法を十分駆使できなかったことも反省点として挙げられる。

(3) 中央教育審議会での特別活動の現状と課題、改善の方向性（検討素案）の中で述べられている内容で、今後授業に取り入れたい重点的な検討課題として考えたいことは

① 小1プロブレム解消のためにも、第一学年の学級活動の時間の重点的運用を図るという点をどうするか。

② 社会的自立の推進に関連して、「異年齢集団による活動」や「地域との連携」の在り方をこれまで以上に考える。

③ 体験活動の推進に関連して、自然の中などでの集団宿泊体験、本物の自然の大切さを一層重視する学校行事をどう見直していけばよいか等である。

(4) この講義を終えての授業アンケート（13項目）の中で、特に評価の高かった項目は順に

① この授業では、学生同士の討論やグループワークを取り入れる工夫がみられた

② この授業の内容には、興味・関心が持てた

③ この授業を受講して、非常に満足している

③ この授業では、学生が質問や意見を述べられるような配慮がなされた（同数）であり、少しは意図したことが伝わったかなと正直ホットした面もあったが、改善点、課題も多くあり、今後検討を深めたい。

最後に、15回目の総括テストのあと小学校における「特別活動の意義」についてあなたの考えを述べよというテーマで全員に書かせたので、そのうちの一人を紹介する。

小学校における「特別活動の意義」についてあなたの考えを述べよ。

特別活動とは、目標にもあるように、望ましい人間関係や、集団の一員としてよりよい生活への参画、協力して諸問題を解決するための自主的・実践的な態度を育成するためである。子どもたちが将来過ごしていく社会という場は、集団で生活していく場であるため、そのための人間関係の作り方や社会性の基礎をしっかりと身につけるためにあると考える。また、幼稚園や保育所に通っていた子どもたちにとっては、小学校という場が初めての集団生活をする場になるため、集団生活の第一歩として小学校から行うことは適切だと考える。

小学校教育の目標である「生きる力」を子どもたちに身につけさせるためにも、クラブ活動や学校行事などを通して「主体的に学ぶこと、様々な人との関わりを学ぶこと」、学びの深まり（知識の増え）や豊かな人間性、情緒の安定（心身ともに健康な身体）につなげると考える。私自身、クラブ活動での学年のお兄さん、お姉ちゃんと関わりことや、食育栽培活動をしたことで、異年齢の人との人間関係の築き方、命の大切さ、ありがたさなどを学ぶことができたため、主体的に学ぶことができる特別活動は、重要であると考える。

小学校における教育内容は、大きく分けて1、教科指導 2、道徳 3、特別活動 4総合的な学習の時間 5、外国語活動の五つである。教科指導以外では、今回取り上げた望ましい集団活動や体験的な活動を通して豊かな学校生活を築き社会性の育成を図るというねらいをもつ「特別活動」が教育活動の最も重要な柱になっているといっても過言ではない。

それは、豊かな体験の場である集団活動を通して

- ① コミュニケーション能力を磨き、人と人との関わり方を学び、自尊感情を育む。
- ② 互いの違いを認め合い、仲間と手を携えて責任を果たそうとする気持ちを育てる。
- ③ 仲間と協力し思いやりの気持ちが育ち、だれもが主役になれる人づくりに貢献できる。
- ④ 集団で目標を達成する喜びを感じることが出来ることなどが挙げられる。

学生は、この講義を通して特別活動が何を大事にしているか、子どもにどのような力をつけたらよいかについて学ぶとともに、小学校での体験を振り返ったりしながら、近い将来、学校現場でどのような実践をしなければならないのか、グループで考え議論を深め、具体的な構想やプランづくりを経験したことは貴重な財産となったのではないかと考える。

特別活動のねらいは、「生きる力」を育てることであり、集団で学ぶところにある。それは学校での学びが何より一番大きいことをしっかりと胸に刻み、学生に伝えていくことが重要である。

引用文献

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 「特別活動編」』
神戸市立西脇小学校長 高田和周『第29回近畿特別活動研究協議会「神戸市大会」研究紀要』
神戸市立甲緑小学校『第29回近畿特別活動研究協議会「神戸市大会」教育実践記録』
神戸市立甲緑小学校『第29回近畿特別活動研究協議会「神戸市大会」学習指導案』
神戸市小学校教育研究会『特別活動部学級活動ハンドブック』

参考文献

- 中川昭則『小学校 特別活動の特質と指導』文溪堂 1996年
宮川八岐・石塚忠男・杉田洋『小学校 特別活動実践事例集』小学館 2009年
原 清治他『特別活動の探求』学文社 2007年
江川玫成『特別活動の理論と方法―改訂版―』学芸図書 2006年
宮川八岐『小学校特別活動 基礎・基本と学習指導の実際』東洋館出版社 2002年

Abstract

The lecture of “teaching methods on Special Activities” has stressed the understanding of educational meaning, goal, object, and contents of Course of Study. So, the author felt that students tended to be passive.

Then, the author made it a rule to take a time to discuss on Special Activities, to play a teacher’s role or school children’s role, and to introduce the result each other at the next lecture.

Special Activities play an important role in the turning point of every educational activity, have an indispensable part in educational activity which aims to foster energy to live.

This article is a case study seeking the useful and abundant learning to students who will become teacher next year.